『教行信証』学習会３回目　　２０２０年4月１６日

学習形態　　新型ウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。
テーマ　　『教行信証』とは何か。
―　『教行信証』撰述の意図　―

今回は、皆さんにお会いできないので、学習会ノートのほかに“しゃべくり調”でノートを作りましたので、講義のつもりで読んでいただければ幸いです。

今回は『教巻』ですが、前回は標挙の文をお話ししましたが、これは「釋親鸞の名告り、天親・曇鸞を荷負う優婆提舎である」というようなことを申し上げたと思います。で、今回の『教巻』の前２行、この２行はこの『教行信証』の正体を決定づける大事な意味を持っていると思うんです。学習ノートに記載していますが、二回向四法の教相判釈ですね。二回向とは前回の五念門からの展開として親鸞が引き受けている訳ですね。

そして四法は教行信証。親鸞は法然を「真宗興隆の大祖源空法師」と表明されていますが、法然の教判とはちっと違いますよね。皆さん、これをどう考えますか。

私は法然に逆らっているとは思いません。法然の「教一・機一」を「行」の中に取り込んでいると思うんです。『行巻』の教と機の比校対論のところです。これを法然の教判で言えば、教と機が「行一」に入り込み「行一」と「証一」になってくる。でも親鸞は、「行証久しく廃れ」と述べられてくるのですが、法然は行である念佛をもって「念佛為本」と言い、親鸞は行と証の間に「信」をいれた。それだけ信を問題視していたんだろう。それで「信心為本」と。親鸞という人はどこまでも納得しなければ済まない人ではなかったのかと思うんです。

師、法然と弟子親鸞の関係は、とても面白い関係だと思いますね。私たちも自分の先生という時、どんな関係になっているか。よく「～先生はこう言っている」などというんですが、私なんか「それがどうした。」と言いたくなる。先生の話を受け止める、ということは、どこまでも吟味し思考していくことではないのか。そうして心から納得したなら、「～先生が言っているから」ではなく「これが自分の考えだ」と。佛教には著作権というものはない。問題は仏教に随順しているかどうかだけである。少なくとも親鸞は法然の言うままにはなっていないでしょ。親鸞にとって弟子とは仏の弟子であって人の弟子ではないんです。それは後に「真の仏弟子」の問題が出てきますから、おいておきますが、法然と親鸞がどんな関係だったのか、想像してみると楽しいですよ。

この教行信証は、「～にはこう言っている」という引用文が数限りなく出てきます。私たちはこれをどう見るかです。今言ったように、その見方一つで「教行信証」ががらっと変わってきます。それをこれから学んでいくわけですけれども。

まず課題７。まず二回向について、五念門の回向から始めるということについてノートの參）に述べていますから分かると思います。

次に四法についてですが、天台の教判と法然の教判とを並べて見比べて考えてみてください。法然の教・機・行・証、この教と機、これは興味深いですねぇ。これは師と弟子を指している言葉ではないかと思います。従来の仏教教団における組織の問題を指摘して、新たな教団を構築していく教判ではないかとさえ見ることができます。法然が描く仏教教団とは、師弟の関係ではなく、仏法と己の関係として

の教団である、と。仏法と己の関係においてのみ行と証が成立する、と。ですから吉水教団は全く師弟関係のない、如來と自己の関係のみにおいての信仰が形成されていったのでしょう。そういう意味を持っていると思いますね。天台の方はよくわかりません。誰か知っている方がおられれば、一度聞いてみればいいかと思いますが。

天台教学の教判と言ったら「五時八教」が有名ですが、五時は皆さん聞いたことあるでしょう。釈迦が説かれた順番を五時に分けて考えられている訳ですね。それに四つ四つの八つの説かれる方法があるというわけです。この四一の法門は『法華経』「方便品」によって構築されていくのですけれど、これによって一乗思想が成立していくのです。ここの四つの「一」はただ一つということで一乗に向いていくわけです。ですからこの四つは順序的な要素よりも四つを羅列している意味合いのほうが大きいと考えられますが、詳しいことはわかりません。

課題８．これは私の好奇心みたいなものですけれども、浄土真宗とは何者か、という問題。「化身土」に出てくる「門余」という言葉ですね。言ってしまえば、真宗というのは仏教全體からあふれ出る教であるというわけでしょ。それはどういうことですか。「化身土」まで行くにはいつになるかわからんので、皆さんの頭に入れて考えて頂ければと思っているんです。その問題がじつは標挙の文とこの文との比較すればうきぼりになってくるわけです。

次の「この経の大意は～」各自読んでいただければ、と思いますので、
課題９に行きます。これは、參）にあるように、「出世本懐」という問題と重なってくる問題です。ここで親鸞は「出世本懐」とは言わずに「出世の一大事」したのか。「出世本懐」はすでに『法華経』で言われていることであるから言わなかったのか。親鸞は比叡山で『法華経』を中心とした学びをしてきている訳ですから、知らないはずはない。皆さんはどう感じますか。少なくとも親鸞は「佛佛相念」を「出世本懐」と言いたいんではないかと思うんです。

そのことを「五徳現瑞」「佛佛相念」「如是の義を問う」という三点で示そうとしているのではないかと考えています。その中身はノートの方で見て頂ければと思います。そして
課題１０の御自釈となるわけですが、「此」は「彼」に対する言葉なので、目の前にある、という意味を持ちますね。また「是」は「非」にたいするわけですから、「そうではなくて是れだ」といういわば強調的な意味合いになるわけですね。ここから問題なのですが、底本で「是」と使っているのを高田本で「此」に直しているのはどういう意図なのか、ということです。そうすると、近いところを指し示すことになるので、憬興師の文を指示していることになるわけですね。

皆さん、この分章読めますか。なんか、わけがわからないですよね。ちょっとノートの方に整理しましたので見て頂ければ、と思うんですが、釈迦の五徳現瑞に阿難の態度行動を対比させて来るんです。五徳現瑞は、阿難がお釈迦様の姿を言った言葉で、それに対応させた三つは、釈迦が阿難の姿を述べた言葉なんですね。一つ一つの言葉の意味は憬興師が説明しておられますが、大事なのは阿難が釈迦を褒めたたえた五徳現瑞と釈迦が阿難を褒めた三つがリンクしているということが大事なんです。

ここに「顕真実教の明証」と述べられた理由がある、と考えられます。どうでしょうか。ただ「真実教の明証」ではなく「顕」真実教です。なぜ「顕」がついているんですかねぇ。

そして「誠に是れ」と。これは「これこそ」という強調なんでしょう。それが六つ述べられ、最終的には「これこそが時と機が熟されたところの真実の教である」と結ばれていると思います。この「時と機が熟される」。これはどういう意味なんでしょうかね。また、この六つの関係性は。まだ読みこなさな

きゃならんところではあるんですが、あとは皆さん、ノートを参考にしながら考察していただければと思います。

結び